〈秀しげ子〉のために I

――芥川龍之介との邂逅以前――

中田睦美

序

秀しげ子は、芥川文学に微妙な影を落とし、どこか異彩を放つ女性として、これまでにもしばしば言及されてきた。だが、彼女をめぐる言説は、果たして秀しげ子その人や芥川との関係を正当に伝えるものだったろうか。たとえば二人の関係にしても、彼女の方から強引にまとわりつき、芥川に災厄をもたらすだけの存在、という見方が一般的である。芥川自身、《愁人》から《狂人の娘》へと呼称を変え、遺書にも《やつと□夫人の手を脱した》と記したせいもあり、彼女はスキャンダラスな〈噂の女〉に甘んじてこなければならなかった。こうした言説は、ひとり芥川ばかりでなく、同時代の作家たちにもおおむねひきつがれている。しかし、実際の秀しげ子は、ビアトリス社など大正期文学の一翼を担った〈新しい女〉のひとりであり、歌人としての活動も相当に活発だった。にもかかわらず、従来の言及は、彼女の具体的な〈足跡〉にほとんど触れることもなく、いわばバイアスのかかった一方的なまなざしと先入観によって、その人間像を形成してきたのではないだろうか。

たとえば、秀しげ子を〈歌人〉と呼びながら、彼女の歌（本文）はわずか十余首が紹介されたにすぎない。ところが、今回の粗雑な調査[一]だけでも全く未紹介の三百余首の短歌と短文二編を新たに見ることができた。すでに題（詠）や歌数だけが紹介されてきたものを併せると、計四百首を優に超える歌が確認できたことになる。また、彼女の消息は、当時の女性誌『ビアトリス』や『讀賣新聞』および歌誌『潮音』等に意外に多く見られ、その活動の範囲や人脈も、文壇・歌壇から劇界および女性運動にと多岐にわたる。

秀しげ子のそうした多彩な足跡の一端を少しだけ触れてみよう。たとえば、彼女は太田水穂主宰の潮音社の催しにも積極的に参加し、歌誌『潮音』に毎号のように歌が掲載された時期もある。また、茅野雅子を中心とする春草會にも意欲的に参会していたよう

で、歌会の模様が月に一度『讀賣新聞』に掲載されており、彼女の歌も随所にみられる。ちなみに、彼女は春草會五十回記念（大11・2・27）や百回記念（大15・6・27）にも参加し、大正期の一時期、歌壇で相応の地歩を占めていたとも考えられる。たとえば大正11年1月1日『讀賣新聞』紙上には、「早春」と題する十首が単独で掲載されている。こうした扱いから当時の彼女に対する注目度が推し量れよう。また、『現代婦人詩歌選集』（正富汪洋担当執筆「明治大正婦人詩歌小史」大10・5、婦女會社）にも彼女の出身地と歌三首の紹介が見え、ほかに『婦人公論』（昭2・1）にも現代女性歌人の一員として「現代女流百人一首」にもその名と歌が掲げられている。

上記以外にも秀しげ子の姿は『讀賣新聞』紙上にしばしば登場する。[二] 福永挽歌の短篇集出版記念会「『夜の海』の會」が永楽倶楽部で開かれ、彼女の姿とキャプションにその名が見られる（大9・4・25）。そのほか、雑司ヶ谷開泉閣での「故岩野泡鳴氏追悼會」にも列席していたことが『讀賣新聞』（大9・6・9）および『新潮』（大9・7）で確認でき、さらに「岩野泡鳴氏七週忌記念會」にも彼女の名が記されている（大15・5・9）。また、神奈川県大磯海岸で海水浴を楽しむ「十日會々員の大磯行」写真に付されたキャプションにもその名がある（大10・8・14）。ほかに、『讀賣新聞』「よみうり抄」では、「秀しげ子夫人」として彼女の旅や帰京の消息、自宅電話番号の変更などが散見される。こうした彼女の〈足跡〉について従来の先行文献は全く触れてはいない。

なお、今回の調査では、夫・秀文逸の経歴を示す二、三の資料も見られた。これまでほとんど知られていなかった文逸の人間像やその風貌、および職歴なども多少明らかにすることができた。そこから推すと、秀夫妻の結婚生活についての言及もいくつか訂される必要があるようだ。

同時代作家の描いた秀しげ子像もまた再検討を要する。彼女の映像を伝える作品といえば、広津和郎の「彼女」（昭25・3『小説新潮』）がよく引かれてきた。しかし、同じ広津の手になる短篇「哀れな女」（昭2・1『文章倶楽部』）もしげ子を素材とする一篇だと思われる。とすれば、彼女をモチーフとする構想は、広津の内部で芥川自裁直前の昭和二年にすでに作品化が試みられていたわけで、広津は二十余年もの間〈秀しげ子〉というモチーフを反芻していたことになる。そのしげ子像の変化や落差も興味深い。

ともあれ、こうした足跡に接すれば接するほど、〈秀しげ子〉その人と芥川文学およびその周辺の文学者たちが描いた人間像との間にはズレがあるように思える。

広津だけではない。芥川の死後、矢継ぎ早に発表された瀧井孝作・宇野浩二・村松梢風らによる交友録風の作品は、秀しげ子に関する限り、芥川の残した《動物的本能》というイメージをそのままうけつぎ、むやみに増幅していく。芥川側の、あるいは男性側の、こうした言説に最も驚いたのは、秀しげ子自身だったので

はあるまいか。後年のしげ子が、江口渙の『我が文学半生記』（昭28・7青木文庫）を読んで、《あなたが書いているようなことは無かった》との手紙を寄せ、江口が詫びを伝える返事を出したところ、彼女は自分の胸中を聞いて貰いたい旨を再び江口に伝えたという。すでに数え六十三歳、老齢となったしげ子がなおも真剣に訴える以上、われわれはもっと（彼女自身の声）に耳を傾けるべきではあるまいか。

そこでまず、秀しげ子の実像をふり返ってみたい。紙数の関係上、今回は彼女の生涯の前半、すなわち、芥川との出会以前に限定し、現在まで調査し得たところを報告する。

なお、秀しげ子の生涯については、従来、主として以下の文献によって言及されてきた。本稿もこれらの先行研究に負うところが少なくないので、その主要文献をまず掲げておく。

（A）森本修「作家時代Ⅰ」（『芥川龍之介伝記論考』昭39・12　明治書院）。秀しげ子に関する基礎的な素描は本書から出発する。ちなみに、本書の内容は『新考芥川龍之介伝（改訂版）』（昭46・2　北沢図書出版）として改訂されており、本稿でもこの改訂版に従う。

（B）森本修「芥川をめぐる女性」（『人間　芥川龍之介』昭56・5　三弥井書店）。ここでは、『潮音』・『新潮』・『岩野泡鳴全集』・『新小説』・「我鬼窟日録（別稿）」・日本女子大学の『桜楓会会員名簿』が紹介されている。

ちなみに「芥川をめぐる女性」の初出は、『論究日本文学』（第十号　昭34・4）所載のものだが、『人間　芥川龍之介』収録時に大幅な加筆がなされており、本稿ではこの三弥井書店刊単行本の記述を採用した。

（C）森啓祐「「愁人」から「狂人の娘」へ」（『芥川龍之介の父』昭49・2桜楓社）。ここでは、佐佐木茂索に宛てた芥川の書簡や「手帖　八」、また秀しげ子の没年時などが記されている。

（D）浅野洋「秀しげ子の（足跡）二、三」（『鑑賞現代日本文学11　芥川龍之介（月報）』昭56・7　角川書店）ここでは、『ビアトリス』・『日本女性録』・『東京朝日新聞』などから彼女に関する新たな知見が紹介されている。

（E）『芥川龍之介事典』（昭60・12　明治書院　菊地弘　久保田芳太郎　関口安義編著）。本事典の内容は主として森本修氏の『新考・芥川龍之介伝（改訂版）』（前出）などの記述が参照され、秀しげ子の概要が述べられている。

（F）関口安義「第五章　女性」（『芥川龍之介　闘いの生涯』平2・7　毎日新聞社）。主として森本修・浅野洋らの成果をふまえたもので『女の世界』との関連が新資料として提示されている。

上記の主要先行研究については、上記の符号（A、B、C等）をもって本文中に掲げておく。また、それ以外の主要関連文献については、そのつど（補注）を付し、当該記事との関連性や出典を後掲することとする。

なお、先行研究との混同を避けるために、『讀賣新聞』およびその他から得られた新たな知見に関する典拠や論者の推測する根拠などは、そのつど注記（　）として後掲することとした。また、秀しげ子の作品については、『潮音』および「よみうり婦人欄」の『春草會詠草』掲載作品など、未紹介および紹介済みの作品をも含め、一括して改めて紹介する予定である。また、彼女の歌人としての活動も、別の機会において取り扱うつもりなので、本稿では簡略に述べておきたい。

第一章　誕生から結婚まで

秀しげ子は、明治二十三（一八九〇）年八月二十日、小瀧顕八の二女、小瀧しげ子として生まれている。しげ子の旧姓の呼び方に関して、日本女子大学名簿の該当箇所を見ると、《戸田》から《小野・小瀧・小野》と続き、次に《和田・渡邊》となっており、イロハ順で並べられていると考えられるので、その呼び名（小瀧）は「ヲダキ」もしくは「ヲタキ」ではなかったかと思われる（明45・6「（櫻楓會會報）花紅葉」第十集）。ただし、後述する秀しげ子と安成二郎との会見記では、《本姓は小瀧（コタキ）》のルビが添えられているが、ここでの本文は総ルビとなっており、編集者の見解である可能性が高いように思われる。また、先行研究では小瀧ではなく、《小滝》としている。

小穴隆一の「二つの繪」では秀しげ子のことを《S》と称し、《高利貸の娘。（中略）藝妓の娘。》と記す。（補注一）この言を信ずれば、父・顕八は、高利貸業を営み、母（姓名不詳）は芸妓であったらしい。関口氏は、後年のしげ子の派手な行動から《裕福な家で甘やかされて育った》と推定しているが、幼い頃に生い育った家庭の経済状態など詳細は不明である。

ところで、父・顕八は長野県埴科郡南条村（ハニシナ ミナミジョウ）の出身と伝えられる（C）が、いままでしげ子本人の出身地あるいは出生地は必ずしも一致してはいない。たとえば『日本女性録』（D）によると、東京都千代田区出身とのみ記載され、（四）一方、長野県埴科郡南条字横尾三〇七に生まれる（E）とする説もある。吉田精一は東京神田の生まれとだけ記しているが典拠は明らかでない。（補注二）関口氏は、彼女の出身地を東京市神田区錦町二十番地とするが、その典拠は明らかでない。従来の記述では彼女の出身地あるいは出生地に関してこのような諸説があり、その事実関係が錯綜している。そこで関口氏が新資料として紹介している『女の世界』（大6・3）から、「秀夫人の片影」と題された秀しげ子の会見記を参看したところ、しげ子の出生地が《神田區錦町二十番地》であることが裏付けられた。また、そのほかの資料として、大正六年五月号の『女の世

界』に「大正婦人録」[五]という項目が設けられ、そこにも秀しげ子の略歴が見られ、彼女の出身地が《神田區錦町二十番地に生る》と記されており、会見記と同様の記述となっている。

父の出身地が長野県であったことから、戸籍の上では便宜的にその地を彼女の出生地としたため、先行研究（D・Eなど）のような異同が生じたのかもしれない。だが、前掲「秀夫人の片影」および「大正婦人録」などの記述によって、ここでは《神田區錦町二十番地》をしげ子の出生地と考えたい。

明治四十二（一九〇九）年（19歳）

四月十三日、しげ子は日本女子大学校（現日本女子大学）家政学部に第九回生として入学する。[六]日本女子大学蔵の学籍名簿には、小瀧しげ子ではなく、《小瀧しげ》と記されている。いまのところ東京市のどの小学校に通っていたのか分からないが、《高等女學校から目白の女子大学へ入って》（「秀夫人の片影」）とあり、同記事中で《學校にゐて甘へた間が長う御座いましたので》といったことばもあることから、高等学校も日本女子大学校付属高等女学校と考えられる。[七]

明治四十五（一九一二）年（22歳）

四月十三日、日本女子大学校家政学部を卒業する。大学部第九回・高等女学校第十一回・豊明小学校第一回を併せた合同の卒業証書授与式が、当日午後一時より新講堂で行われている。式は成瀬校長が送辞を述べ、ほかに井上哲次郎や大隈重信らが祝辞を述べている（明45・6「（櫻楓會會報）花紅葉」第十集）。彼女が日本女子大付属の高等女学校の卒業生だとすれば、同誌「母校通信」記事から逆算して七期生か八期生であったかと推測される。

四月二十日、秀文逸と結婚し、秀姓を名乗る。彼女は女子大学卒業後、七日目にして秀家に嫁いでいる（「秀夫人の片影」）。しかし、これまでしげ子の結婚は、なぜか大正元（一九一二）年十一月とするものが多かった。たとえば、夫婦の結婚年月日を大正元（一九一二）年十一月と言及するもの（B・C）もあれば、年月日を具体的に示していないもの（E）、さらに大正一年（ママ）とのみ記しているもの（Fや『日本女性録』）などである。ちなみに『日本女性録』は、その成立過程があまり確かでなく、印刷状態が復刻に見えること、また、各項目の執筆者が無署名であることなどから、元版の存在が考えられるが、詳らかにしない（D）。

一方、夫・秀文逸の略歴を記す杉浦善三の「電氣主任　秀文逸君」[八]によれば、秀文逸は欧米各国の劇場へ照明装置の見学のために帝劇から派遣されて《約半歳後に亙り》渡欧し《大正二年二月九日を以て無事歸朝》したとある。この資料の記述が正しいとすれば、秀文逸の出発は大正元（一九一二）年の七月下旬から八月の上旬、おそくとも九月初旬までに出国したと考えられる。もちろん秀文逸がいったん欧米から帰国し、大正元年十一月にしげ子と挙式をあげた可能性も皆無ではない。もしくは杉浦善三による《約半歳後》という記述について、実際の滞在期間は三カ月程度だったとみなせば、十一月結婚説と辻褄が合うかもしれない。しかし、先にも記したように、安成二郎との会見「秀夫人の片影」

では、《卒業後七日目にはもう、秀夫人になつてゐた》との言及があり、当然のことながら、この記述はしげ子自身によって容認されたものであろう。つまり、この記事から、彼女が明治四十五（一九一二）年四月二十日の時点で秀文逸の妻になっていた可能性が高い。また、日本女子大学校を卒業した学生たちの校友会として組織される櫻楓會の「會員宿所姓名簿」には、家生学部九回生として、同（一九一二）年六月の時点で、すでに《秀しげ子》として名簿に登録されており、その傍らには旧姓《小瀧》と付記されている（前出「（櫻楓會會報）花紅葉」２２８頁）。しかも、彼女の住所が《小石川區大塚窪町二四》と記されており、この場所が秀夫妻の新居ではなかったかと推測される。

明治四十五（一九一二）年四月二十日の時点で《秀夫人になつてゐた》という言及が、仮に秀文逸との婚約だけを意味するものだとし、十一月に正式な結婚式が行われたのだとしても、同年六月の桜楓会会報の名簿に《旧姓小瀧》と付記されているのは、いささか腑に落ちない。また、夫・文逸の渡欧期間が現実に約半年間におよぶもので、大正二年二月九日の帰国（前掲「電氣主任秀文逸君」）が事実だとすれば、彼の出国はおそらく大正元（一九一二）年八月の中旬になるが、その間に秀文逸がしげ子との結婚のためにわざわざ帰国したというのも、当時の交通事情や費用などを考えるとあまり現実的ではない。

以上の点から、十一月結婚説の可能性はきわめて薄く、この頃のしげ子の足跡は、明治四十五年四月十三日に日本女子大学を卒業し、同年四月二十日に秀文逸と結婚、大正元年八月頃、夫・文逸が欧米各国の劇場を視察するために出発、翌大正二年二月九日に帰国した、と考えるのが順当ではなかろうか。

ところで、ここに妙な挿話がある。それは秀夫妻があまり似合いの夫婦でなかったとする説である。その理由として、秀文逸という人物が《「堂々とした外見で、事実まさに紳士であったが、穏やかな人柄というより、むしろ茫洋として何を考えているのか外に表わさない風」》な人であったために、《とにかく彼等夫婦はだれの目にもあまり似合いの組み合わせにはみえなかった》と伝聞形式で書かれ（C）、あたかも彼らが形ばかりの夫婦関係であったかのような物言いである。何を典拠とするのか不明だが、こうした伝聞が一方でひとり歩きをし、しげ子の人間像をゆがめてきたのではなかったろうか。

しかし、安成二郎との会見では《「毎晩、旦那さんを帝劇にお迎ひにお出でになるさうですね。」》と聞かれ、その質問に対してしげ子は《「初日だけで御座いますのよ。前にはちつとも二人で歩けないのをつまらないと思ひましたけれど」》と答えている。夫を劇場まで迎えに出ることが、わざわざ会見で質問されるほど目立つ行動であったようだが、当時の婦徳という常識にふさわしく甲斐甲斐しい妻の役割を演じた結果にせよ、また、しげ子自身が外出好きであったにせよ、そこには周囲の評判などを気にも留めず、忙しい夫と少しでも一緒に居たい気持ちを素直にあらわす人物だった可能性もある。《「前には（中略）つまらないと思ひま

したけれど」》という口振りには、慕っている夫とともに帰路だけでも一緒に歩いていたいという、新婚生活の新妻の気持ちが回想の口調で現されているといえないだろうか。にもかかわらず、《茫洋として何を考えているのか外に表わ》さない夫との結婚生活を、そのまま彼ら夫婦の冷淡な関係だと決めつけるのは、先入観に縛られすぎた見解とはいえないだろうか。

第二章　夫・秀文逸

ここでさきほど掲げた杉浦善三の「電氣主任　秀文逸君」を中心に、しげ子の夫である秀文逸に若干触れておきたい。序でも述べたように夫・文逸については、これまでほとんど言及されたことがなく、彼の人間像が不明であることも妻・しげ子像に必要以上のバイアスをかける一因になったと思われるからである。先にも述べたように杉浦の記した資料には、秀文逸の略歴が掲げられ、また彼の鮮明な写真も掲載されている［巻末写真資料①］。

しげ子より七歳年上の文逸は、明治十六（一八八三）年十二月に岡山県小田郡陶山村（スヤマソン）に生まれた（C）。明治四十二年、二十六歳で東京高等工業学校の電気科（現東京工業大学）を卒業し、その後横河工務所に入社する。秀文逸は横河工務所の社員として、帝国劇場をはじめ三越呉服店その他大建築物の照明工事を手掛けており、少壮気鋭の電気技術者として注目された。文逸は同社の西野前専務や横河工学博士らに推挙され、帝国劇場株式会社に転職し、帝劇の電気主任となって着任する。

たとえば雑誌『帝劇』に、大正十二年や大正十五年の「社務多忙に付年始の禮を缺申候」と題された劇場からの年始挨拶状があり、そこに社員一同として秀文逸の名前も掲げられている。同じく、大正十五年八月の劇場からの「暑中御見舞申上候」という挨拶状にも、同様の形式で秀文逸の名が見られる。また、大正十一年一月十一日には、帝劇の山本久三郎専務の発議によって「帝劇舞臺装置研究會」の発会式が行われ、秀文逸も出席している。ほかに大正十三年十月の「帝劇營業演出兩方面の新陣□容」には、劇場専属の俳優や技術社員らが新しく配置された部署の報告が掲げられており、秀文逸の名も《電機主任》として記されている。

これらの資料から、秀文逸が横河工務所から帝劇へ移り、帝劇の社員となったことが跡付けられるが、彼がいつごろ帝国劇場に入社したのか、具体的な期日は特定できない。だが、文逸が帝劇に《入社後幾莫もなくして、欧米に派遣》されたという記述から推せば、その時期は、人事移動が行われる大正元（一九一二）年の春先（四月頃）から渡航直前の初夏（六乃至七月頃）あたりと考えるのが妥当ではなかろうか。

さきほど秀夫妻の結婚期日についての言及でも触れたように、文逸は欧米各国の劇場を視察して帰国後、電気工学に関する最新の情報を学んだ新進技術者として、帝國劇場の照明や電気設備の充実に貢献した。たとえば大正十四年八月号の『帝劇』に、文逸は「アドソール應用冷房装置に就いて」という原稿を寄せ、大規

模な劇場空間を夏場どのように冷却しているのか、その冷房方法について説明をしている。冷房装置がまだ世間にあまり普及しておらず、またその汎用性も少なかったであろう時代に、いち早く新技術を導入した証ともいえ、このことからも文逸が電気主任として劇場の電気機器業務に携わる主要な社員であったことがうかがえる。

第三章　〈新しい女〉への接近

大正三（一九一四）年（24歳）

この年、しげ子は長男・不二彦を出産（B・C・F）。ただし、誕生月日は不明である。しげ子は心臓が弱かったらしく、その為に子供に母乳を与えたり、抱いて歩くことも出来なかった（「秀夫人の片影」）。長男の不二彦は、早稲田大学理工学部を卒業し、大正五年生まれの県立高知高等女学校を卒業した女性・岐美子（旧姓不詳）と結婚、日刊スポーツ社に勤務した（『日本女性録』）と伝えられる。

大正五（一九一六）年（26歳）

九月、「大正婦人録補遺（三）」に秀しげ子の略歴が載せられ、記載される住所は《下谷區上野櫻木町》とある。（『女の世界』大5・9、2巻9号）。結婚当初に住んでいた《小石川區大塚窪町二四》から、大正五年九月までに上記の住所に転居したのであろう。十月頃、有楽座の廊下で、青柳（有美―筆者注）[十六]から安成二郎を紹介される（「秀夫人の片影」）。

十月十五日、秋雨のなか午後一時から東京市芝区にある青松寺で、ビアトリス社主催の第一回「故女流作家追慕會」が行われ、五十名以上の参加者があった。そこに安成二郎も来会しており、秀しげ子も出席している。この会は、樋口一葉・大塚楠緒子・瀬沼夏葉ら優れた才能を抱きながら惜しくも夭折した明治以来の閨秀作家を追慕するものであったらしく、当日の天候も会の趣旨にふさわしい時雨空と記され、会は午後五時すぎに散会している。[十七]同月二十三日付の『東京朝日新聞』第五面に「「新しい女」の新しい団體」という記事が載り、ビアトリス社の活動とその機関雑誌『ビアトリス』が紹介され、そこに会員としてしげ子の姓名と写真が掲載されている[巻末写真資料②]。

十一月、鞆音（トモネ）という号で「まぼろし」八首を詠んでいる（『ビアトリアス』1巻5号・64頁）。吉田精一氏は、しげ子が《泉鏡花を崇拝》していたために、雅号の鞆音も鏡花の作品中にある人名からとったと記す。[補注三]しげ子自身、学生時代のひと頃に泉鏡花の作品に傾倒したと述べており、鏡花作中の女性の性格に惹かれ、雅号の鞆音は《鏡花さんの小説の中の綺麗な娘の名をとつた》[十八]と語っているが、現在、調査中である。

大正六（一九一七）年（27歳）

一月三日、『女の世界』が主催する第一回の「かるた會」に出席している。散会は午後十一時過ぎであったらしいが、琴平町に帰る人々とともに、豊川稲荷前から赤坂見附まで歩いた。そこか

ら外濠線の電車に乗るつもりであったが、三人の男性たち（姓名不詳）がさらに歩くことを主張したため、三人の女性も同意して随分と歩いたようだ（「秀夫人の片影」）。同月中旬、五反田にあるビアトリス社同人の岡田幸子宅で開かれたビアトリス社の新年會にも出席している。散会後、しげ子は、当日の会にビアトリス社から招待されていた安成二郎とともに五反田から新橋まで山の手線に乗り合わせ、帰路についた（「秀夫人の片影」[十九]）。二月、「歌留多會の後に」と題し、先月催された「かるた會」の印象記を寄稿している（『女の世界』大6・2）。

三月、秀しげ子の会見記（全六頁にわたる）ならびに写真が「秀夫人の片影～新しき文学を愛する新しき夫人」と題して掲載された（『女の世界』［巻末写真資料（F）③］）。

四月、「病みてある日」八首を秀鞆音で発表する（『ビアトリス』2巻3号）。

五月、「大正婦人録」に、秀しげ子の略歴も掲載され、記載された住所が《芝區櫻川町八》とある（『女の世界』3巻5号）。前々月掲載された安成二郎との会見記（「秀夫人の片影」）にも、取材のために秀の家がある《芝の櫻川町のお宅を訪れて》とあるので、大正五年九月の「大正婦人録補遺（三）」（前出）に記載された《下谷區上野櫻木町》の地から、大正六年二月までに《芝區櫻川町八》に転居したのであろう。

六月、秀鞆音で「白菖蒲」を発表（『女の世界』3巻6号）。

八月十四日前後、勝浦（現千葉県勝浦）へ旅行している。[二〇]

九月、秀鞆音で「堪へがたき日に」を発表（『女の世界』3巻9号）。

十一月、秀鞆音で「霧の流」十四首を発表（『潮音』3巻11号）

この頃からしげ子の歌が太田水穂の主催する短歌雑誌『潮音』に載せられ始めている。ちなみに「霧の流」の掲載誌はいままで『潮音』の三巻四号（大正六年四月）と記されてきた（A）が、同誌に当該作は掲載されておらず、同名の作品は前述の通り三巻十一号（大正六年十一月）に載せられている。この歌の掲載月にこだわるのは、しげ子の『潮音』への参加時期を問題とするためで、潮音社および同人たちといつから関わりを持ち始めたのかが検討材料となるからである。この点もまた別の機会に詳述したい。

同月十一日の第二日曜日、潮音社主催の「植物園の歌會」に出席する。この日の天候は先日来の雨が上がった晩秋の青空であったらしく、また街の雑音は立ち並ぶ木立の向こうから《わずかな音律を響かせる》といった状況のなか、紅葉した木立を背景に歌会が開かれている。当日の参加者は十三名であり、「虫穴に入る」「墓」「黒髪」などの難題が含まれた探題のなかから各人が抽選によってそれぞれの題を引いた。小春日和に照らされた暖かい芝生の上に坐って果物を食べながらも、出席者は句作に苦労したらしい。その後、社友らの詠んだ歌は太田水穂によって批評や添削がなされている。星空のもと、植物園付近[二一]の竹早町の停留所で散会している（『潮音』3巻12号）。

十二月、「秋の日ざし」十首を秀鞆音子で発表（『潮音』3巻

12号）。先月の潮音社の催し「植物園の歌會」の報告があり、会に参加した十三名のうち十一名が入選し、一首ずつ載せられている。しげ子は「秋の夜」が探題であったらしく、その歌が載っている（『潮音』3巻12号）。

大正七（一九一八）年（28歳）

一月、「冬枯るゝ頃」八首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻1号）。同月、『女の世界』（4巻1号）巻末に新年挨拶として九十三名の名が記され、秀鞆音で名を連ねる。

二月、「新しき日に」九首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻2号）。

三月、「鶫の聲」十首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻3号）。四月、「早春の歌」九首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻4号）。同月七日、川俣慶一や中尾未承らとともに「十日會」[二二]の幹事として川甚へ遠足會を催している[二三]。しげ子が歌壇や文壇と交流し始めたきっかけとして、この「十日會」やビアトリス社同人らとの交流が大きかったと思われる。この点についても別の機会で考察したい。

五月、「春の惱み」十首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻5号）。「春の惱み」の八首目に、《春深み父が御墓の盛り土のくろみそめけりうれゐしまに》と詠まれたものや、続く九首目に《切り髪の母のうなぢにやせみえて又新しき涙おぼゆる》という表現がみえ、また、四首目に《信濃路の雪》の直後に《（歸郷）》と付記されていることなどから推して、大正七年四月以前の頃、しげ子の父・小瀧顕八が亡くなったと思われる。同月十七日前後、京阪地方および奈良へ旅行している[二四]。

六月二十三日午前十時より、小石川区三軒町清水谷の道庵で催された潮音社三周年記念短歌会に出席している。この日の午前中は連日の梅雨空が止み、一時の晴れ間だったらしい。会の出席者は総数二十三名であり、午前十一時過ぎには道庵の二室が出席者で埋まり、廊下の端にまで人が溢れていたとされ、社友らはあらかじめ課された「夏草」と「燈」の兼題を清書して当日携えている。兼題以外に「梅雨」や「雀」・「曇り」などの即題が昼前から詠われるが、昼食の寿司が午後一時過ぎまで届かず、出席者は空腹を抱えて互選による選歌を交互に朗詠しあったという。その後、遅い昼食を終え、一通りの披講も済んで各人の詠んだ歌の批評に移った。そのころから、次第にあやしくなりはじめた空模様は、散会の午後六時ごろまで持ちこたえたようで、各人は大急ぎで帰宅の途に向かったと記されている（『潮音』4巻7号）。

七月、「一途の聲」八首を鞆音で発表（『潮音』4巻7号）。この「一途の聲」には、前々月に関西へ旅した風景が織り込まれ、《春日野の藤》・《仁和寺の鐘》・《清水の舞臺》・《鴨川の水》・《住吉の磯》など、京阪や奈良の景観が詠まれている。同号に、先月潮音社が催した三周年記念短歌会の報告がなされ、しげ子の歌は即題で洩れているが、兼題の「夏草」で選歌されている。また当日の出席者の氏名が列挙されているが、女流歌人では最初に秀鞆

音子の名前が上がっている（『潮音』4巻7号）。

八月、「鳥かげ」九首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻8号）。同月十二日前後、信州安代温泉山口屋に滞在し、二十日頃軽井澤へ赴き、八月末帰京する予定であったらしい。[二五] 同月二十六日に「岩野泡鳴氏筆禍慰問懇親會」が雑司谷の開泉閣で催された。岩野泡鳴の小説が『新小説』と『雄辯』に掲載される予定であったが、発売禁止の措置を受け、その筆禍を慰めるための懇親会であった。[二六] この懇親会の模様を撮影した写真が「讀賣新聞」紙上に掲載されており、そこに秀しげ子らしき人物も同席しているように思われる。当該記事のキャプションには全員の名前が記されておらず、しげ子の名前も見当たらないが、彼女が泡鳴主催の「十日會」に初期のころから参加していたことや同会の趣旨などからして出席していた可能性は高く、また、他の写真との比較からも秀しげ子当人ではないかと思われる姿が見える[二七]［巻末写真資料④］。ただし、十月号の『潮音』に《秀鞆音子は信州澁温泉より歸京》（4巻10号「編輯消息」）との記事があり、滞在先が違うことから再度の信州行かと考えられるが、もしかすると岩野泡鳴の慰問懇親会に出席せず、八月十二日前後から九月半ばまでの約一ヶ月余り、信州に居続けで避暑を楽しんだという可能性も否定できない。いずれにせよ、同号の歌はおそらくこの信州旅行の風景を詠み込んだと思われる。そこにはまた、《一人旅》という表現も織り込まれている（『潮音』4巻10号）が、実際に一人旅であったかどうかは定かではなく、約一ヶ月余の間、家庭を空けることが可能だったろうか。

九月、「眞夏の夢」九首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻9号）。

同月十日、「十日會」の九月例会に出席している。当日の出席者は、岡本かの子や蒲原英枝らのほか、しげ子も含めて十三名であった。翌月六日付けの『読売新聞』には、この「十日會」例会の写真が掲載され、そのキャプションが付されている[二八]［巻末写真資料⑤］。

十月、「秋風篇」九首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻10号）。

十一月、「草紅葉」七首を鞆音で発表（『潮音』4巻11号）。

十二月、「熱に惱みて」十首を秀鞆音子で発表（『潮音』4巻12号）。

おわりに

序でも述べたように、本稿では紙幅の都合でもっぱら芥川と出会う以前の秀しげ子の足跡を眺めるにとどまった。芥川との邂逅以後の彼女の経歴および歌人としての評価や解釈、ならびに歌の紹介、またほかにビアトリス社など当時の〈新しい女〉と彼女との関わりなどは稿を改めて論じたい。

〔写真資料〕

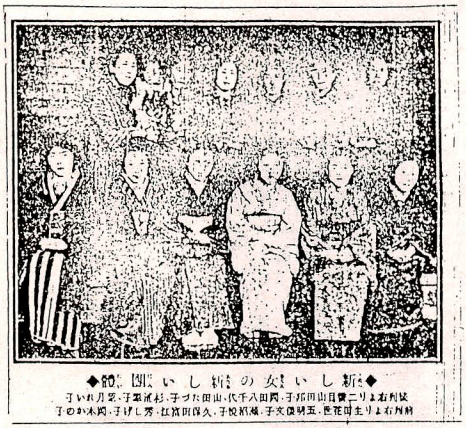
①〔出典〕杉浦善三『帝劇十年史』
（大9・4　玄文社）

電気主任　秀　文逸君

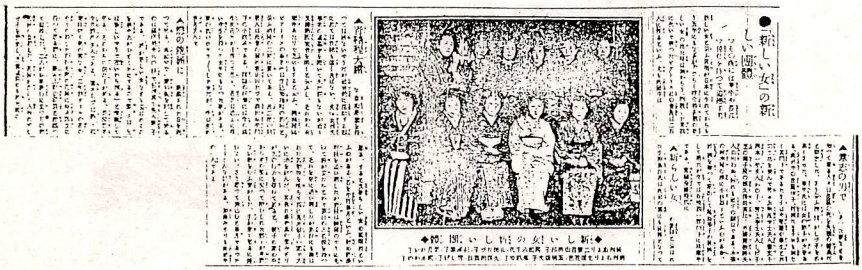
君は岡山縣の出身にして明治十六年十二月を以て生る。明治四十二年東京高等工業學校電氣科を卒業し、直ちに横河工務所に入り、帝國劇場。

その初め三越呉服店其の他大建築の照明工事を擔任し優秀なる少壯技術者として先輩に嘱目せられしが果然西野新專務及横河博士は帝劇電氣主任として君を推擧したり。入社後幾莫もなくして歐米に派遣せられ約半歳に亙りて各國劇場に於ける照明裝置を見學し大正二年二月九日を以て無事歸朝す。帝國劇場が照明の點に於て遙かに群を抜くは君の如き新進技術家の在ればなり。

②部分拡大



②〔出典〕『東京朝日新聞』（大5・10・23・第五面）

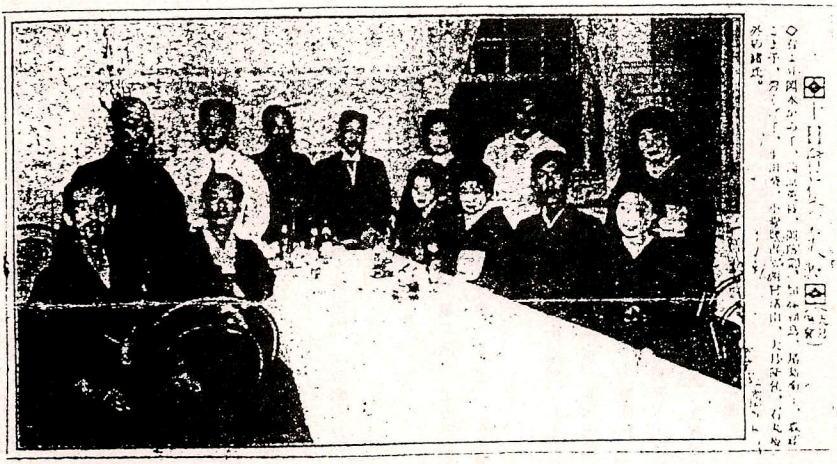


③〔出典〕『女の世界』（大６・３、３巻３号）

（田舎百二十二篇文本）

④〔出典〕『讀賣新聞』（大７・９・８・第７面）

⑤〔出典〕『讀賣新聞』（大７・10・６・第７面）



補注

（一）小穴隆一「二つの繪」（『鯨のお詣り』昭15・10　中央公論社）。

（二）吉田精一「三　芥川龍之介の恋人」（吉田精一著作集第一巻『芥川龍之介Ⅰ』昭56・11　桜楓社）による。ちなみに、本書の初出は『歴史と人物』（昭46・11　中央公論）に掲載されたものであるが、本稿では、桜楓社刊単行本のものに従っている。

（三）前掲補注（二）に、秀しげ子は《泉鏡花を崇拝し、雅号の鞆音も、その作品中の人名からとった》とある。また、吉田氏は《文学を談じる相手としては同じく鏡花好きの芥川にとって、しげ子はウマのあう話相手だったのかも知れない》と推測している。

注

（一）本稿は、平成七年度近畿大学大学院文芸学研究科修士論文『秀しげ子と芥川龍之介～〈新しい女〉と大正期文壇の一側面～』の一部要約である。

（二）『読売新聞文芸欄細目』（索引）に「秀しげ子」の項（サ行で「秀（しゅう）しげ子」となっている）があるが、本紙を調査した結果、遺漏も少なくなかった。

（三）西澤武彦「長野県の地名（埴科郡）」（『日本歴史地名体系第二〇巻』昭54・11　平凡社）

（四）『日本女性録』（昭43・4　国際総合調査事務局）

（五）『日本近代文学大事典』第五巻（昭52・12）の「女の世界」の項目に《「大正婦人録」が役立つ》とある。

（六）日本女子大学図書館に学籍調査を依頼し、その調査結果に基づく。

（七）大正六年三月号の『女の世界』に、秀しげ子の《小學校は何處か知らないが、高等女學校から目白の女子大学へ入って、そこの大學の家政科を卒業された》とある。

（八）杉浦善三「電氣主任　秀文逸君」（『帝劇十年史』大9・4　玄文社）

（九）西澤武彦「岡山県の地名（小田郡）」（『日本歴史地名体系第三四巻』昭63・4　平凡社）

（一〇）「社務多忙に付年始の禮を缺申候」（『帝劇』大12・1および大14・12）

（一一）「暑中御見舞申上候」（『帝劇』大15・7）

（一二）『讀賣新聞』（大11・1・13、第7面）「よみうり文藝〔よみうり抄〕」に〔帝劇舞臺裝置研究會〕として、秀文逸の名前がある。

［本文］山本専務發議で岩村和雄、伊坂海雪、井上弘範、鳥居清忠、横河民輔、吉田健夫、田中良、並木玉風、濱村米蔵、邦枝完二、久米秀治、福地信世、宇野四郎、平岡權八郎、秀文逸、薄拙太郎、鈴木大助、平岡晋吉、阿竹繁俊、竹柴龜三郎、荒井金太郎、稲垣治太郎、浦木毅氏等二十三氏を會員に一昨日帝劇に於て發會式を興行した。

（一三）「帝劇榮業演出兩方面の新陣□容」（『帝劇』大13・10）

（一四）前掲注（五）

（十五）「震災後記」（『帝劇』大13・7）
（十六）秀文逸「アドソール應用冷房装置に就いて」（『帝劇』大14・8）
（十七）青柳有美。明治六（一八七三）年～昭和二十（一九四五）年。『女の世界』の発行者。
（十八）「故女流作家追慕會の記」（『ビアトリス』第1巻5号、大5・11）
（十九）秀しげ子「根本に觸れた描寫」（『新潮』大9・10）の本文にも以下のようにある。《其の頃の誰れでもの大凡が通る過程でゞもあつたやうに、私自身も學生時代の一と頃を鏡花氏の作に囚はれて居りました。つまりあゝした女性の性格に興味を傾倒して居た結果の自然として。》とある。ほかに、「秀夫人の片影」（『女の世界』大6・3）にも彼女の言及が以下のようにある。《「何といふ題でしたか、題は忘れてしまいましたが小説の中の綺麗な娘の名をとつたので御座います」「誰れでも一度は、鏡花さんの物に夢中になる時代がありますやうですね」》
（二〇）この日時は、安成二郎の執筆から推した結果であり定かとは言えないが、本文に以下のようにある。《親しく夫人とお話をしたのは、此のかるた會の歸路が最初であつた。そして、此の稿を草する迄に、私は又三度、夫人にお目にかゝつてゐる。一度は道で。一度は此の稿（秀しげ子との会見記―筆者注）の為に芝の櫻川町のお宅を訪れて。一度は一昨日、五反田の岡田幸子さんのお宅のビアトリス社の新年小集の席で》とあるので、一月中旬ごろに新年会が催されたとみたい。
（二一）『讀賣新聞』（大6・8・14、第7面）「よみうり文藝〔よみうり抄〕」
（二二）東大付属の小石川の植物園。
（二三）『讀賣新聞』（大7・3・13、第7面）「よみうり文藝〔よみうり抄〕」
（二四）『讀賣新聞』（大7・5・17、第7面）「よみうり文藝〔よみうり抄〕」
（二五）『讀賣新聞』（大7・8・12、第3面）「よみうり文藝〔よみうり抄〕」
（二六）『讀賣新聞』（大7・9・8、第7面）「日曜附録」
（二七）前掲注（二六）
（二八）『讀賣新聞』（大7・10・6、第7面）「日曜附録」

［後記］なお、写真②は、浅野洋氏（D）がその所在を指摘し、写真③は関口安義氏（F）が石割透氏の教示によってその所在を指摘、その一部（顔部分）が『新潮日本文学アルバム』（一一九四年六月）に掲出されている。いずれも、未紹介とは言い難いが、掲載紙（誌）の原画の復刻にもそれなりの意味があると考え、参考のために供した。

（なかた・むつみ　本学大学院博士課程）